■平成 23 年度秋の総会の開催（11/25～26）

□平成 23 年 11 月 25 日（金） 13 時 50 分より

□高知会館、坂本龍馬記念館

□参加者数　総会及び四国本部例会 70 名
（内一般参加８名）
懇親会 46 名
見学会 17 名

本年度の秋の総会は、公益法人日本技術士会四国本部の高知例会を兼ねており、防災講演会、修習技術者セミナー、防災委員会報告、坂本龍馬記念館見学会・講演会と２日間にわたり盛りだくさんの内容で開催された。

講演会に先立って、右城代表幹事より、「本年度を見てもわかるように災害が多くなってきており、技術士への期待がますます大きくなってきている。」等の旨の挨拶があった。

右城代表幹事の挨拶

第一部の防災講演会は、「来るべき南海大地震・大津波から四国を守るためには」と題して、独立行政法人海洋研究開発機構　津波地震・防災研究プロジェクトの金田プロジェクトリーダー、「東日本大震災から防災・減災を考える－原発耐震の動向」と題して、高知県地震防災研究会の吉川会長より講演を頂いた。

□　「来るべき南海大地震・大津波から四国を守るためには」　独立行政法人海洋研究開発機構　津波地震・防災研究プロジェクトプロジェクトリーダー　金田義行

海洋研究開発機構の金田プロジェクトリーダーからは、東北地方太平洋沖地震のメカニズムや現象、東日本大震災は広域にわたって複合災害（地震動、津波、液状化、地盤沈降、津波火災、漂流物等）が発生したこと、過去の南海地震や南海トラフでの超巨大地震の可能性について説明があった。

海底に設置した地震計や圧力センサー等によりリアルタイムで観測し、地震速報にも貢献できる地震・津波観測監視システム（ＤＯＮＥＴ）ついて説明があり、巨大地震に備えるためには、現在設置している東南海地震震源域にだけでなく、南海地震震源域にＤＯＮＥＴ２、南海トラフ全域をカバーするためにＤＯＮＥＴ３と観測網を拡張する必要があること。また、次世代パソコンを使った地震動・津波・災害シミュレーションについて説明があった。

以上のように最前線の予測研究等の非常に興味深いお話をして頂き、あっという間の１時間であった。

金田プロジェクトリーダーの講演

□　「東日本大震災から防災・減災を考える－原発耐震の動向」　高知県地震防災研究会　会長　吉川正昭

高知県地震防災研究会の吉川会長からは、米国の開発から 12 年遅れの 1963 年に日本で原発が誕生した。日本では、石油危機により原子力へと進んでいった。また、日本は地震多発国であり、高度な耐震設計技術を要求される中、原発建屋や原子炉が本当に安全かど

うか確認し、実証するための施設として、1981年に多度津に世界最大規模の振動台が造られた。1995年の兵庫県南部地震を契機にＥ－ディフェンスと呼ばれる三次元震動破壊実験施設が造られ、実物大での検証が行えるようになった。核分裂と核融合の違いと、原爆が核分裂、水爆が核融合で、破壊力は水爆の方がある。

以上のように原発の歴史及び原発の耐震技術を高めるための施設についてお話を頂いた。

吉川会長の講演

第二部の修習技術者セミナーは、「参加型手法を使って、防災・減災についてみんなで考えよう」と題して、Ｃプランニングの花岡会員が進行役を務め、７～8 人のグループに分かれ、ワークショップ形式で行われた。

□ **修習技術者セミナー「参加型手法を使って、防災・減災についてみんなで考えてみよう」 Ｃプランニング 花岡史恵会員**

はじめに、好きな動物により、５班にグループ分けを行った。そのグループ内で、アイスブレイク（緊張をほぐす）のための自己紹介が行われた後、防災・減災の必要性について討議が始まった。まず、各自が思いついた分だけポストイットに意見を書いて出し合い、その意見について議論し、グループとしての意見の取りまとめ行い、最後にグループの代表者が発表を行った。

各グループとも活発な意見を出し合い、グループそれぞれのあじもあり、参加者にとっては大変有意義なセミナーであった。

進行役の花岡会員

グループ内の討議の様子

各グループの発表の様子

第三部の防災員会報告として、「東日本大震災による藤沼ダム（福島県須賀川市）決壊に関する調査報告」として、四国本部防災委員会の吉岡会員より報告があった。

□ **「東日本大震災による藤沼ダム（福島県須賀川市）決壊に関する調査報告」 四国本部 防災委員会 吉岡崇会員**

調査メンバーは、四国本部防災員会から３

名、香川県技術士会から１名、東北本部防災委員会から２名の計７名で、平成 23 年 10 月 11～12 日の２日間の日程で調査が行われた。藤沼ダムは、堤高 18.5m、堤長 133.2m、灌漑面積 840ha の規模の農業用のため池で、構造型式はアースダムである。昭和 12 年に着工、戦争をはさんで昭和 24 年に完成し、その後何度か改修が行われている。藤沼ダムの決壊により、死者７名、行方不明１名、家屋全壊 22 棟、床上浸水 32 棟、床下浸水 24 棟の大きな被害が発生した。堤体の上部と下部では材質が異なり、上部はボソボソの砂を多く含み、下部は粘土分を含む良質な土を丹念に締め固められており、決壊の一つの原因として、堤体上部の液状化・流動化が考えられる。最後に、防災委員会として、四国にもため池が多く、藤沼ダムの経験を踏まえ、南海地震対策に取組んでいくとの報告があった。

吉岡委員による防災委員会報告の様子

□ 懇親会

懇親会は、高知県技術士会創立 25 周年の祝賀会を兼ねて行われた。また、懇親会に先立ち、参加者よる写真撮影が行われた。

右城代表幹事の挨拶の後、四国本部加賀本部長、高知県技術士会村山顧問より、創立 25 周年の祝辞を賜り、四国本部作道事務局長の乾杯で宴が始まり、会員同士の懇親を深め、途中、西川会員の再入会の紹介があり、四国本部栗本総務委員長の中締めで閉会した。

参加者による写真撮影

右城代表幹事の挨拶

加賀本部長の祝辞

村山顧問の祝辞

作道事務局長による乾杯

再入会の西川会員

懇親会の様子

栗本総務委員長による中締め

□ 坂本龍馬記念館見学会･講演会

坂本龍馬記念館では館内の見学を行ったのち、森館長から坂本龍馬の生き方や大河ドラマ「龍馬伝」にまつわる話などの講演をして頂いた。

館内には、龍馬が残した手紙や龍馬が使用した刀など多くの遺品が展示され、龍馬が生きた時代の一端を垣間見ることができた。また、館内のあちこちで来館者が展示品に対する思いや感想が語られており、龍馬の人気の高さは元より、現代人の中に生きる龍馬も見えたような気がした。

その後、行われた森館長の講演は、激動の時代を生き抜き、時代を変えた龍馬の話だけに全ての話が新鮮で興味深いものであった。

特に、龍馬を知るためには龍馬が書いた手紙を読むことや、公平を思想とする勝海舟との出会いが龍馬の平等に影響を与え、その後の明治維新へと躍動することなどが印象に残った。

また、「龍馬伝」の脚本家やドラマに出演された俳優の方の龍馬に対する思いなども聞くことができ、まさに森館長でなければ聞くことのできない逸話などもたっぷりと講演して頂いた。

聴講時に参加者が皆、自然にうなずき、自然に笑みを浮かべている姿からも講演の楽しさや充実度を感じることができた。

退館時には、入口にある龍馬像とシェークハンドして、今回の見学会および講演会は終了した。

坂本龍馬記念館での見学の様子

森館長による講演

龍馬とシェークハンド